

パラレルワールド

第5回

素晴らしい！

矢倉は思わず大声で歓声を上げたくなるのをなやくらんとか抑えた。

この方法なら、ギャンブルより遥かに金になる。なにしろ、何の証拠も残さず人間を始末できるのだ。目的は恨みだろうが、金だろうが、何だっていい。誰かに死んで欲しいと思っ**だ**れているやつを探して、依頼を聞いてやればいいのだ。最初は低料金でも構わない。確実に殺せるとわかれば、向こうから依頼はやってくるだろう。値段を吊り上げるのはそれからでもいい。それよりもまず今は人を殺すことを楽しめばいい。

矢倉は怪しげな場所に入入りし、そこで殺しの依頼はないかと尋ねて回った。ただし、殺しの依頼を探すのはあくまで世界Bだけだ。その頃、訓練によって、短時間なら世界Aと世界Bで自分の身体を違うように動かすことができるようになった

ていた。ちようど右手と左手で同時に別々の字を書きよなもの、簡単ではないが、不可能ではないといったところだろうか。

そのうち、矢倉に殺しの依頼をする者が何人か現れた。本気で、一か八か頼ぼちんでいるのか、単なる冗談なのかはわからなかったが、矢倉は可能な限り、依頼通りにターゲットを殺してやった。何人かは喜んで金を払ってくれた。だが、恐怖にかられて逃げ出す者や、難癖を付けて支払いから逃れようとする者たちもいた。

矢倉は金を払わない者たちを脅した。たいていは脅しに屈して金を払ってくれたが、中には、再三脅しても金を払おうとしないやつらもいた。そういう場合、矢倉は依頼主を殺した。もちろん、殺したからといって、金は入ってこない。しかし、支払いを渋った者が殺されたということが広まれば、依頼料を踏み倒そうとする者は減る。そして、ますます殺し屋としての矢倉の名声があがった。

噂うわさが広がるにつれ、依頼の数は増えてきたが、警察に目を付けられるという困った事態も発生し

た。私服警官おほと思しき人物が矢倉の周辺に出没するようになった。それはわざと警察の監視をおわすことによって、殺人を抑止しようと思っっているのか、あるいは矢倉の観察力を過小評価しているためなのかはわからなかったが、とりあえず矢倉は今まで通り、偶然の殺人を続けた。

どんなに怪しくても矢倉は実際に手を下す訳ではない。あくまでちよつとした偶然に手を貸すだけなのだ。矢倉の周辺では明らかに偶然とは言えない程の高確率で死亡事故が起きたが、当然ながら彼がその事故に関与したという証拠は見付からなかった。そんなことが何度も続くうちに私服警官はすっかり影を潜めてしまった。警察が諦めたあきらのか、本格的に隠密捜査を始めたのかはわからなかったが、矢倉は気にすることなく、今までのやり方を続けた。自分の超能力を理解できる人間など絶対に存在するはずがないと思っていた。

殺人は常に成功し、面白いように金が入ってきた。矢倉はいくらでも、贅沢ぜいたくな暮らしができるようになった。——世界Bでは。

矢倉は二つの世界の時間のずれを利用して、ターゲットを事故に巻き込んでいたため、当然ながら世界Aでは事故は起きないのだ。事故が起きなければ、誰も死なないので、仕事の代金を貰うことはできない。つまり、世界Aでは矢倉は凄腕すこうづての殺し屋でも何でもなく、ただのニートなのだ。

世界Bの金をなんとか世界Aに送れないかと知恵を絞ったのだが、その方法だけはどうしても見付からなかった。

もちろん、世界Bで贅沢ざんまいができるのであるから、世界Aでの成功を無理に求める必要はない。だが、世界Aでも衣食住は必要だ。矢倉は世界Aでは最低限のアルバイトをし、なんとか食っていけるだけの収入を得た。

世界Bでたらふく食ったとして、その分の栄養は世界Aの肉体へも及ぶのではないだろうか？

そんな期待を持っていたが、あるとき世界Aの自分が随分やせ細っているのに気付いた。このままの生活を続けていれば、いずれは餓死するか栄養失調で病気になってしまうだろう。矢倉は何度

も試行錯誤を繰り返し、世界Aである程度の収入を得る方法を編み出した。

矢倉は世界Bで築いた殺し屋としての地位を利用して、経営者や政治家の裏情報を集めた。ある政治家は愛人を囲っていた。ある会社は粉飾決算を行っていた。ある経営者は議員に賄賂を渡していた。もちろん、それらはしよぼいもので、矢倉程の殺し屋にとってはたいした価値があるものはなかった。だが、ただのフリーターである世界Aの矢倉にとっては、極めて貴重な情報であった。もちろん、警察沙汰にされたら、言い逃れのしようがないので、強請る額は極僅かなものだった。だが、少なくとも人並みの生活は送れるようになった。

これで充分だ。

矢倉は思った。

遊びや贅沢は世界Bでいくらでもできる。世界Aでは、死なない程度の健康的な生活が送ればそれでいいのだ。

矢倉は世界Bで派手に人を殺したが、二つの世

界はほぼ同じ歴史を辿っていた。誰か重要な人物を殺しても、よく似た性格と能力を持つ人物がいつのまにか後釜あしがまに座っていた。確証はなかったが、これは偶然ではないように思えた。おそらく二つの世界は見えない領域で絡み合っているのだ。だから、矢倉がいくら世界Bを改変したところで、結局は世界Aによく似た世界へと収斂しゅうれんしていくのだろう。

矢倉の人生は順風満帆に思えた。

その日、矢倉はいつものように殺人のターゲットの観察を行っていた。

たいてい交通事故を利用するのだが、場合によってはそれ以外の事故を利用することもあった。

世界Aでターゲットから数メートル離れた場所で、突然マンホールの周りに亀裂きれつが走り、道路が陥没し、直径三メートルの穴が開いた。

怪我人けがにんは一人もない。

矢倉は即座に穴に近付き、中を覗のぞいた。一メートルぐらいの大きさで、ごつごつした角を持つ道

路の破片が数メートル下に散乱していた。もし、
陥没の瞬間、マンホールの周辺にいたら、かなり
の確率で死亡するだろうと思われた。

矢倉はにやりと笑った。

これは使える。陥没の瞬間、ターゲットの歩く
場所を少しずれさせればいいだけだ。

世界Aでやることはもうない。矢倉はその場所
を立ち去ろうとした。

だが、その瞬間、彼は違和感を感じた。

何だ？

矢倉は振り向いた。

そこには小さな子供がいた。年齢は五、六歳とい
ったところか。じっと、道路の陥没現場を見てい
た。傍には母親だと思われる若い女がいた。

不思議だ。

矢倉は思った。子供に対する気持ちではない。
自分に対する気持ちだ。突然、道路が陥没したの
だから、普通の子供なら興味を持つのは当然だ。
そういう意味で、子供の行動に不思議はない。不
思議なのは、その子供に違和感を感じた自分だ。

俺は何に違和感を感じたのか？

矢倉は少し離れた場所から親子らしい二人を観察した。

母親は子供の手をしっかりと掴んでいた。そして、できれば、その場所から早く離れたいようだった。その行動に不審な点は何もない。子供を危険から遠ざけたいと思うのは当然だ。子供を持つた経験はないが、その程度の常識はある。

矢倉は次にもう一度子供だけを見た。

子供は不思議そうに穴の中を見ていた。それもまた、当たり前前の行動に見えた。

突然、子供は顔を上げた。

矢倉と子供の目が合った。

矢倉は心を貫かれたような気がして、思わず目を逸らしてしまった。

今のは何だ？ この俺があんな餓鬼に睨みあい
で、気合い負けしたというのか？ いや。落ち着
け。そんなはずはない。単なる気の迷いだ。

矢倉は額の汗を拭った。

そもそも俺はまだ何もしていない。この世界A

だけではなく、世界Bでもだ。もしあの餓鬼が何かを感じ取ったとしたら、俺の心を読んだということになる。そんな超能力がある訳がない。万が一、そんな超能力があったとしても、あんな年端もいかぬ餓鬼が何かを言ったからといって、誰が気にするだろうか？

矢倉はもう一度子供の顔を見て、心に浮かんだ疑念を晴らしたかった。だが、それをするのは自分の弱さを認めることでもある。だから、矢倉は敢えて子供の顔を見ないようにした。いや。弱さを認めることを拒否しただけではない。現実、矢倉は怖かったのだ。もし、またあの子供と目が合ったとしたら、心が砕け散ってしまいそうな気がしたのだ。

ターゲットは中年女性だった。最近、めきめきと実力を付けてきた新進気鋭の政治家だ。どうやら、これ以上、彼女に人気が出るのをよしとしない勢力があるらしい。党内の反対派か、それとも別の政党かはわからないが、そいつらのエージェントが矢倉に接触してきたのだ。

一週間以内に、彼女を亡き者にしろ。一週間経って、彼女が死んでいなかった場合は、暗殺失敗ということ、料金は支払わない。

かなり厳しい条件だった。

だが、こうして、条件が整ったのだ。

俺には幸運の女神が付いているのかもしれない。

世界Bでターゲットは歩道をほぼ直線状に進んでいた。

矢倉は不自然にならないように、彼女の前方に進んだ。彼女との距離はほんの二メートル程だ。

「おええ!!」矢倉はその場でいきなり激しく嘔吐おうとした。

矢倉は自由に嘔吐するという特技を持っていた。生来持っていた能力ではなく、この商売を始めるに当たって、訓練により身に付けたのだ。

ターゲットの中年女性は顔を顰しかめると、少し左に寄って車道に出た。右に寄らなかつたのは、彼女の前方やや右側に矢倉がいたからだ。すべて、計算通りだった。

矢倉は頭の中で秒数を数えた。

二、一、ゼロ。

矢倉は顔を上げた。

その瞬間、女性の姿は消えた。マンホールの周
辺の道路が陥没し、女性はそれに巻き込まれたの
だ。

全く予期しない状態で、数メートルも落下した
ら無傷ではいられないだろう。

矢倉は女性の状態を確認するために、浮き浮き
と穴に向かった。

えっ？

矢倉は凍り付いた。

女性の悲惨な姿を見たからではなかった。彼は
悲惨な事故死にはすっかり慣れっこになっていた。
ぐちゃぐちゃになった死体を見ても潰れた蚊つぶを見
たとき程度の感慨しかなかった。

彼が凍り付いたのは、そこに子供がいたからだ。
穴の向こうから、こちらを見ている。

もちろん、世界Aで道路が陥没したときにその
場にいたのだから、世界Bでその場にいるのは不

思議でも何でもない。むしろ、いる方が当然なのだ。

だが、矢倉は強い違和感を感じていた。

あの餓鬼は俺の力を知っている。

彼はそう直感した。何がどうということではない。ただただそう直感したのだ。そして、おそらくあの餓鬼もまた俺の力を直感しているに違いない。

どうする？

矢倉は戸惑った。

若い男が子供の手を引いて崩落現場から離れようとしていた。

おや？ 世界Aでは母親と一緒にだったはずだ。

矢倉はポケットからスマホを取り出した。

とにかくあの餓鬼の情報を集めなければならぬ。まずは写真だ。

シャッター音がした。

シャッター音がしないように改造しようかと思っただけでもあったが、下手に改造して変な疑いを掛けられるぐらいならと、そのままにしていたの

だ。

周囲の人々が一斉に矢倉の方を見た。おそらく、死体の写真を撮る悪趣味なやつだと思ったのだろう。

だが、レンズが死体ではなく、群衆の方に向けていたため、人々はすぐに矢倉への関心を失ったようだった。

矢倉はもう一度子供の様子を見た。

子供は相変わらずこっちを見ていた。そして、父親らしき若い男までもがこっちを見ていた。

シャッター音に気付かれたか？

矢倉は焦った。そして、頭をフル回転させた。

子供から感じる異様な雰囲気は父親にはないようだった。だが、安心はできない。年齢を重ねるとある程度独特な雰囲気隠せるようになるのかもしれない。

子供は矢倉を指差した。

父親は、その手を包み込むようにして、ゆっくりと下ろした。その目はじっと矢倉を見詰めていた。

矢倉はその父子を睨み返した。

おまえらの正体は知らないが、俺の能力を使えば、すぐに突き止められるし、おまえらのことが危険だと感じたら簡単に殺すことだってできるんだよ！

父親はしばらく凍り付いたように蒼あおざめた顔で矢倉を見詰めていた。

矢倉はわざと挑発的に笑顔を見せた。そして、二人に背を向け、ゆっくりとその場を去っていった。

良平は薄気味悪さを感じていた。

あの男は突然、歩道で立ち止まって嘔吐し始めたのだ。

もちろん、そのこと自体はそれほど異常なことではない。異常なことはその後に来た。

男の吐瀉物を避けて、歩道から車道に出た女性がいたのだ。おそらく一時的に車道に出た後、また歩道に戻るつもりだったのだろう。

だが、その目論見が実現することはなかった。突然、道路が陥没し、目の前からその女性の姿が消えてしまったのだ。

その場の全員があまりのことに呆気にとられてしまった。

良平は嫌な予感がした。女性の悲鳴がなかったのだ。落ちる瞬間は驚きで声も出なかったのかもしれないが、落下後に声が出ないのは不思議だった。声を出せない程の重傷なのか、あるいは……。

何人かの人々が穴の縁へと向かっていったが、良平はその場から動かなかった。一人でいるときなら、ひよっとしたら彼も穴の様子を見に行ったかもしれない。だが、今は裕彦ひろひこを連れている。良平は二つの理由で穴に近寄らなかつた。一つは穴の周辺がまだ危険かもしれなかつたこと、そして、もう一つは、裕彦に無残な様子を見せたくなかつたからだ。

人々が立ち止まったため、周辺は急激に混雑し始めた。早く移動しないと、身動きがとれなくなってしまうかもしれない。

良平はできるだけ、早く混雑から抜け出すための経路を探した。

そのとき、シャッター音がした。

悲惨な事故現場でも記念に残したいのだろうか？ それとも、マスコミに売るつもりなんだろうか？

良平はシャッター音の方を向いた。

男が良平たちの方にスマホレンズを向けていた。

良平は驚いて、男の方を見詰めた。

男はスマホを下ろした。

目が合った。見覚えのある男だったが、一瞬誰だかわからなかった。だが、数秒後には思い出すことができた。あれはついさつき、歩道に嘔吐した男だ。道端で大人が突然嘔吐することは記憶に残る出来事ではあるが、その後起きた道路の陥没があまりに大事件だったため、急速に印象が薄れてしまっていたのだ。

何かの急病かとも思ったが、思いの外元氣そうだった。

そして、その目には憎悪が渦巻いていた。

何なんだ、こいつは？

良平は男の表情が全く理解できなかった。この男の顔は知らない。全くの初対面だ。これほどの悪意の籠こもった目で見詰められる覚えはない。

誰かと間違えているのだろうか？ おそらくそうだろう。それとも、何かの誤解かもしれない。さつき嘔吐したときに俺か裕彦が笑ったように見えたのかもしれない。……睨んでいるのは俺ではなく、裕彦なのか？

良平は男の視線がどこに向かっているのか、確かめようとした。だが、十メートル程の距離があるので、男がどこを見ているのかは判然としなかった。ただ、裕彦を睨んでいると思えば、そう見えな^いこともない。

裕彦が男の方を指差した。

良平は裕彦の手を包み込むようにし、ゆっくりと下ろした。

悪い予感がする。

もちろん、予感など信ずるに値するものではないかもしれない。しかし、自分たちの家族には、現に到底信じられないようなことが起こっているのだ。今更、何が起ころうと、驚きはしない。

どこかに行ってくれ。

良平は願った。

俺たちの家族には大変なことが起きたのだ。これ以上の面倒を持ってこないでくれ。

男はにやりと笑った。明るい笑顔ではない。底知れない闇^{やみ}を抱えた笑みだった。

あの男にロックオンされた。

良平はそう感じた。

どうすればいい？ 警察に通報すべきか？ だが、どういう理由で？ こっちを見たから？ 気持ち悪い笑顔を見せたから？ それとも、歩道に吐いたから？

無理だ。どうしようもない。

男は背中を見せた。

良平は正直ほっとした。これ以上、あの男に見詰められていたら、恐怖のあまりどうにかなってしまいそうだった。

男は急ぐ様子もなく、ゆっくりと歩き去っていく。

俺たちにあれだけの敵意を見せて悠然と去っていくところを見ると、相当自信があるのだろう。

もちろん、あの男に悪意があるというのは、俺の思い過ぎかもしれない。あの男は単なる変わり者なのかもしれない。

しかし、そうでなかったら？

男の姿が見えなくなったのを確認してから、良平は裕彦の手を引いて足早にその場を去った。

すぐに家に帰るのも怖い気がして、裕彦を連れて街の中を一、二時間歩き回った。

ちようど事故が起きた現場にあの男が現れた。偶然かもしれないが、そうでないと考えておいた方が無難かもしれない。だとすると、あの男は事故を仕組んだテロリストだ。しかし、どうしてそんな男が俺たちに目を付けたのか？

誰かに相談したいところだが、そんな話をしたら被害妄想だと思われるのが関の山だ。裕彦が二つの世界に住んでいるということだって、誰にも相談できていないのだ。話し合えるのは裕彦と別の世界にいる加奈子^{かなこ}だけだ。

……そうだ。加奈子だ。加奈子には言っておかないと。

「ヒロ君、今、ここにお母さんはいるかい？」

「うん。いるよ」

「じゃあ、今から、お父さんとお母さんはお話ししなくちゃいけないんだ。手伝ってくれるね」

「うん」

できるだけゆっくり喋^{しゃべ}っているとはいえ、大人

の喋る言葉をそのまま伝えることは六歳の子には相当大変だろうと思われた。だが、いつも裕彦は頑張ってくれていた。彼なりの理解の仕方、父親と母親は自分が手助けしなければ、語り合うこともできないとわかっているのだろう。良平はいつも裕彦には申し訳ないと思いつながら、彼に言^{こと}伝^づてを頼んでいた。

「さっき、奇妙な男に出会ったんだ」良平はこの世界ではそこにいない加奈子に向かって語りかけた。

（奇妙って、具体的にはどういうこと？）

実際には加奈子の声を聞くことはできないが、最近では裕彦を通じて、そこにいる加奈子の姿や声をまるでそこにいるかのように思い描くことができるようになっていた。

「俺と裕彦を睨み付けている男がいたんだ」

（睨み付けていた？ 気のせいじゃなくて？）

「ああ。もちろん気のせいなんかじゃなかった」

（知り合い？）

「いや。初対面だ」

(初対面の人物が睨み付けたりするかしら?)

「俺もそれはおかしいと思っただが、実際に睨んだんだから仕方がない」

(近くで、何かあった?)

「ああ。道路の陥没事故があった」

(そっちでもあったんだ。まあ同じ事故が起きるのは当たり前だけど)

「陥没したとき、変な男見掛けなかったか?」

(変な男? 男の人は大勢いたけど、特に変だとは思わなかったわ)

「そっちでも、あの感じだったら、すぐにわかったと思うんだけど」

(じゃあ、こっちにはいなかったのかも。でも、そんな変なことってある?)

「お母さんのところにもいたよ」裕彦が会話を割って入った。

「さっき、お父さんとヒロ君を睨んでいたやつかい?」

「うん」

「睨んだというのは、あの女の人落ちる前か

い。」

(ちよっと待って。女の人が落ちるってどういうこと?)

「道路が陥没したとき、ちょうどマンホールの近くを歩いていた女の人がいたろう?」

(いいえ。そんな人はいなかったわ)

「それは妙な話だ」

(その睨んでた男の人と落ちた女の人には何か関係がありそう?)

「うーん。どうかな? ……いや。よく考えると、関係はありそうだったよ」

(どんな関係?)

「その男の人が吐いたんだ」

(何を?)

「食べ物や胃液だよ。歩道の上に吐いてしまって、それで、その女性は歩道からいったん出て、吐瀉物を避けようとしたんだ。そして、そのせいで道路の陥没に巻き込まれてしまった」

(こっちでは、そんなことは何も起きなかったわ。歩道に吐いた人はいないし、誰も事故には巻き込

まれなかった)

良平は口笛を吹いた。

裕彦は良平の真似まねをしようとしたが、どうしても口笛が吹けないようで、唇を丸めて何度も息を吹き出していた。

「ヒロ君、口笛は真似しなくてもいいよ」

(ありがとう、ヒロ君。お父さんが口笛を吹いたことはわかったわ)

「あの男のせいで、女性の運命は、こっちとそっちで大きく変わってしまったということか」

(ヒロ君、お母さんと一緒にいたとき、その男の人はヒロ君のことを見ていた?)

「うん。じつと僕のことを見ていたよ」

「本当かい? ヒロ君をちゃんと見ていたのかい?」

「うん」

良平は寒気を覚えた。

この二つの世界には大きな違いがあった。こちらの世界では、加奈子が亡くなっており、向こうの世界では良平が死んでいる。他にも何人か死ん

だり死んでなかったりする人々はいるようだし、小さな出来事には食い違いが多い。しかし、大きな世の中の流れや自然現象に関しては、ほぼ一致している。二つの世界の間には何か引力のようなものが働いて、差異が広がるのを防いでいるのかもしれない。あるいは、時間の慣性のようなものが存在して、多少の食い違いがあっても、だいたいの同じように流れていくものなのかもしれない。

だが、今回の事件は異様だった。一人の人物が二つの世界で全く違う行動をとり、その結果、一人の命が失われた。果たして、これは偶然なんだろうか？

(怖いわ)

加奈子も気付いたようだ。

あの男は二つの世界について知っている。そして、おそらく俺の家族に関心を持ったらしい。

良平は何ともいいようのない深い絶望を感じた。今ほど加奈子を抱き締めてやりたいと思ったことはなかった。だが、加奈子はどこにもいない。

良平は裕彦を抱き締めた。

「どうして、二人とも、僕を抱っこしようとするの?。」

良平は笑った。

裕彦はきよろきよろと空中と良平の顔を見て言った。「二人ともどうして笑ってるの?。」

そうだ。俺たちは孤独ではない。直接、姿を見ることもできないし、声も聞こえないが、彼女はここにいる。だから、力を合わせることもできるのだ。絶望する必要はなかったのだ。

「たぶん、あの男は二つの世界のことを知っている」良平は加奈子に語りかけた。

(わたしもそうだと思う)

「そして、それを利用して何か良くないことをしている」

「殺人とか?」裕彦が言った。

「いや。そうとは……」

(大丈夫よ。ヒロ君は怖がったりしない。本当のことを言っちゃうだい。ヒロ君に隠し事をしていては、わたしたちはちゃんと会話ができないわ)

「わかった」良平は裕彦にも正しい認識を持たせるべきだと気付いた。「ヒロ君、今日あったあのおじさんはいい人ではないかもしれない」

「怪人だね」

「そうだ。怪人だ」

「じゃあ、僕たちはヒーロー？」

「ヒロ君もお父さんもお母さんもヒーローじゃない。一般人だ」

「特別なことができるの？」

「駄目だ。ヒロ君はまだ子供だ。ヒーローになるのはまだ早い」

「じゃあ、誰がヒーローになるの？ ヒーローがないと怪人はずっと悪いことをするよ」

良平は言葉に詰まった。

（ヒーローは正体を隠しているのよ）加奈子が助け舟を出してくれたようだ。（だから、どこにいる誰なのかはわたしたちにはわからないわ）

「ヒーローは僕たちを守ってくれるの？」

「ああ。守ってくれるよ」

「本当？ じゃあ、怪人が襲ってきたら、ヒーロ

「も来るんだね。とても、楽しみだよ」

「どう言えればいいんだろう？ 本当はヒーローなんかいないと言えればいいんだらうか？ こんな小さな子にそんな残酷なことを言っているのだから？」

「ヒロ君、あのね……」

「何？」

「ヒーローは……」

うまく言葉が出てこない。

「ちょっと待って。お母さんが話してる」裕彦は加奈子の言葉を聞いているようだった。

（ヒーローを試すようなことをしては駄目よ）

「どうして？」

（ヒーローはとても数が少ないの。でも、怪人はいっぱいいるのよ。一生懸命頑張っても全部はやっつけられないの。だから、ヒーローの仕事を増やすようなことをしてはいけないのよ）

「じゃあ、どうすればいいの？」

（ヒーローが怪人を倒すまで、怪人に見付からなようにするの。そうすれば、いつかヒーローが

怪人を退治してくれるわ)

「うん。わかったよ」

加奈子がうまく説明してくれたらしい。

良平はほっと胸を撫なで下ろした。

「あの男は具体的に何をしていると思う?」

(正直わからないわ。直接手を下さずに偶然を装って、殺人を行っているのよ)

「そんなことが可能なのか?」

(例えば、あそこで道路が崩落することが予めわかっていたら?)

「確かに、予め道路の崩落がわかっていたとすると、あの男の行動は理に適かなっているように思える。しかし、どうして道路の崩落のことがわかるんだ? あいつが何か仕掛けたのか?」

(おそらくそうじゃないと思う。そんなことをしたら、証拠が残ってしまうもの。あの事故はあくまで偶然起きたものだと思う)

「じゃあ、どういうことなんだ?」

(そのままでしょ? あの場所であの時刻、偶然道路が陥没すると知ってたのよ)

「予知能力か？」

（そう言ってもいいと思うわ）

「なんだか、知ってるみたいなおぶりだね。口ぶりといっても、裕彦を通じて間接的に聞いているだけけれど」

（ええ。単純な原理よ。その男は二つの世界の時間差を利用していろのよ）

目から鱗うろこが落ちたようだった。確かに、裕彦から二つの世界の間に時間差があるとは聞いていた。しかし、それをこんなふうにご利用するやつがいるなんて！ いや。そもそも裕彦以外にこんな能力を持っているやつがいるなんて想像もしていなかった。

「つまり、裕彦にも同じことができるってことか？」

（理屈の上では、そういうことになるけど、実際、子供には扱い辛いづらと思うわ。ずっと観察して、正確なタイミングで動かないと、いけないんだから）

「そもそもこんな小さな子供だと、できることが

限られているな。一人で雑踏を歩いているだけで、すぐ誰かに保護されてしまいそうだ」

（その男は裕彦にも同じ力があると気付いたのかしら？）

「こつちに関心を持ったということは、たぶんそうだろうな。しかし、どうして気付いたんだろう？」

（裕彦の態度でわかったんじゃないかしら？ 能力のない人間にとって、あの陥没事故は一度しか起こっていない。でも、裕彦にとっては二回起こっているの。そして、一回目と二回目で状況が大きく違うとしたら、そこに注目してしまうのは自然なことよ）

「しかし、犯人にとっては、それが不自然に見える。二つの世界を同時に体験している犯人だからこそ気付けたんだろうな」

（問題はその男がこれから何をするかよ）

「あの男は自分の能力を悪用していた。つまり、基本的にあの男の良心には期待できないということだ」

(あの男の目に、裕彦はどう映るかしら？ 仲間？)

「そうは思わないような気がする。裕彦のせいであの男は唯一無二の存在にはなれないんだ。裕彦は将来商売敵になると考えるかもしれない。あるいは、自分の前に立ちほだかる邪魔者だと思いかもしれない」

(あの男は裕彦を排除しようとするかもしれない) 加奈子は言葉を選んで喋っているようだった。おそらく「殺す」という言葉を使うと裕彦が怖がると思っただろう。

「確かに危険な男だが、こちらが圧倒的に不利とは限らない。裕彦はあいつと同じ能力を持っている」

(でも、とても幼いわ)

「裕彦には俺たちが付いている。つまり、三対一の戦いだ」

(いざというとき、裕彦は殆ど戦力にはならないわ。そして、あなたとわたしは同じ世界に住んではいない。つまり、あいつと出会うときはいつも

一対一になってしまおうことだわ)

「だとしたら、あいつと出会わないことが肝心だ」

(じゃあ、早く家に帰った方がよさそうね)

「いや。そうとも限らない。もしあいつが俺たちの家の場所を知っていたら、どうだろうか?」

(あの男がうちの住所を知っているという確証があるの?)

「それはない。だが、あいつは裕彦と俺の写真を撮ったんだ。それを利用すれば、多くの個人情報を引き出す方法があるのかもしれない」

(写真を撮られたのは不意だったわね)

「まだあいつの存在を認識する前だった。さすがに、あの時点では全く警戒はしていなかったんだ」

(もう家には帰らないつもり?)

「それは難しいだろうな。とりあえず、真^まっ直^すぐ帰るのだけは避けた方がいいと思う。こうしている今だってあいつに監視されていないとは絶対に言えない」

(急に襲い掛かれたりしないかしら?)

「あいつは、二つの世界の時差を利用して、証拠を残さず殺人を行えるんだ。それを隠すために、直接手を下す犯罪に手を染めるとするのは、考えにくいと思う」

(ということは、何かの事故に合わせようとするということ?)

「そう。それもたぶん、僕のいる方の世界でだ」
(どうして?)

「やつが『予知能力』を使えるのは、こっちの世界だけだからだ。だが、こっちも警戒しているから、今日あいつの罠わなに掛かった人物のようにはならないと思う。あの女性は自分に命を狙ねらう敵がいることも、敵に『予知能力』があるということも知らなかったが、俺たちは知っているんだから」
(じゃあ、わたしの方は少し遠回りをして帰ればいいのかしら?)

「それでいいと思う。とにかくあいつに手間を掛けさせるんだ。そうすれば、事故をでっち上げる余裕がなくなるだろう」

(わかったわ。それじゃあ、それぞれ出発しまし
よう)

良平は裕彦を連れ、家とは違う方面の電車に乗
った。そして、適当な駅で降り、今度はバスに乗
った。

あいつが尾行しているのかどうかもわからなか
ったが、とりあえず人通りが多そうな場所で降り、
少し歩き回った。

歩いている間に、徐々に暗くなってきた。

「お父さん、僕おなかすが空いた」

「そうだね。今日は外で食べて帰ろう」

と言ったはいいが、初めての街ということもあ
り、子供連れで入れそうな店がなかなか見付から
ない。ひよっとしたら大丈夫かとも思う店はいく
つかあったが、初めてでは少し入りづらく感じて
しまう。完全に子供向けとわかる店は表通りには
なかったのだ、路地に入ってみた。少し気にはな
ったが、さすがに人の多い街中で突然襲きい掛ゆうかっ
ては来ないだろうし、そもそもすべてが杞憂きゆうで、
犯人は彼らを追いかけてきていないのかもしれないな

い。

路地に入ると、いきなり人通りが途絶えた。

ひよつとして、この路地に入ったこと自体、犯人に誘導されたのではないかと心配になったが、そのような心当たりはなかった。あいつが人間の心を操れる怪物でないとは言い切れないが、もしそうだとしたらあんなに手の込んだ殺害方法を選んだりほしないだろう。

それでも、良平は表通りに引き返そうかと迷った。

しかし、表通りには、適当な店がなかった。これぐらいのことで引き返していたら、これからずっとあの男の影に怯おびえて不便を強いられることになる。とりあえず今回は試しにこの路地を進んでみよう。大丈夫だ。あいつのやり口はだいたいわかっている。あいつに誘導されないように早目に行動すればいいんだ。

良平は裕彦の手を引いて慎重に道を進んだ。

「ヒロ君、お母さんは今どうしてる？」

「スーパーでお買い物だよ」

「じゃあ、おうちでご飯を食べるんだ」

裕彦は首を振った。「お買い物が終わったら、フードコートで何か食べるって」

スーパーというのは、いつも行っているところだろうか？ だとしたら、ここから相当離れていることになる。二つの世界の裕彦の肉体を互いにこれだけ離れたのは初めてだ。そもそも別個の空間なので、見掛け上の位置には意味がないのかもしれないが、やはり少し不安になる。

「このこと全然違う場所だけど、大丈夫かい？」良平は尋ねた。

「うん。いつもと一緒だよ。見えているものがどっちかわかれば、間違えたりしないよ」

「見えているものがどっちの世界のものかちゃんとわかるのかい？」

「うん。最初はわからなかったけど、今はもうわかるんだ」

「どんな違いがあるんだい？」

「うーんとね。色……かな？」

「色が違うのかい？ どっちかが赤み掛かってい

て、もう一つの方は青み掛かっているとか?」

「えーとね」裕彦はきよろきよろと周囲を見回した。「色じゃない。色は一緒だ。……においかな?」

「におい? どっちかがいいにおいとか?」

「あのね」裕彦はくんくんと鼻をひくつかせた。

「違うよ。においじゃなくて……だいたいわかる感じだよ」

どうやら、世界の違いを判別する感覚をうまく説明できないようだ。もちろん、それは裕彦のせいではない。そのような違いを感じる人が滅多にいないため、その感覚を表す言語がそもそも存在しないのだ。

「ヒロ君、もうわかったからいいよ」良平は優しく言った。

この子はこんなに小さいのに、とてつもない苦勞をしているんだ。これ以上、負担を掛けてはいけない。

「嘘うそはよくないな」がらがらとした男の声が聞こえた。

数メートル先に例の男が立っていた。

髪の毛も髭ひげも伸び放題だったが、どちらも黒々としているので、齢はかなり若そうだった。目はぎらぎらと異様な光を放っている。服装はジーパンとTシャツで、特に目立ったものは付けていない。

良平はぎくりとしたが、努めて表情に出さないようにした。

どうしたものだろうか？ 意味がわからないふりをした方がいいのだろうか？ それとも、自信たっぷりにおまえのことはわかってしていると宣言した方がいいのだろうか？

「俺のこと知ってるよな？」男は言った。

良平はごくりと唾つばを飲み込み、裕彦の手を強く握った。

相手のペースに乗せられては駄目だ。落ち着くんだ。

良平は周囲の様子を確認した。

良平たちと男がいるのは、狭い路地の中だ。一本道ではなく、いくつか道が合流しており、一番

近い脇道わきみちは良平たちの背後二メートル程のところにある。もし、今慌てて、この男から逃げるために走り出したら、それらの道のどこかから飛び出してくる車に撥はねられる可能性がある。もしあいつが急に近付いてきたら要注意だ。

「やっぱり知ってるんだ。あんた今きよろきよろと周囲の様子を見ただろ？ 俺のやり口を知っている証拠だ」男はにやりと笑った。「なあ、あんたも二つの世界を同時に見ているのか？ それとも、その子だけか？ 因ちなみに、俺はこっちの世界を『世界B』と呼んでいる。向こうは『世界A』だ」

こいつは俺を動揺させて、情報を聞き出そうとしている。乗ってはいけない。あくまで無視だ。

「まさか、俺の邪魔をしようとは思ってないよな？ 何を言ったって誰も信用してくれないぞ。それはわかってるよな？」男は饒舌じょうぜつに語り続けた。

どういうことだ？ 時間稼ぎをしているのか？ 早く逃げた方がいいのか？ もう少し待った方がいいのか？ どっちから来る？ あいつの仕掛け

た毘はどこから現れるんだ？

「あのおじさんも僕と同じなの？」裕彦が言った。

男は嬉しうれそうに裕彦に笑い掛けた。「そうだよ。

やっと同類が見付かった。仲良くしような」

「ヒロ君、黙ってるんだ。こいつは怪人だ。ヒロ

君を騙だまそうとしている」

「お父さんは誤解してるんだよ、ヒロ君」

しまった。つい名前を言ってしまった。

「『僕と同じ』と言ったね。『僕たちと同じではな

く』

「子供の言ったことをいちいち真に受けることは

ないだろ」良平は苛々いらいらと言った。

「ああ。やっぱりそうか。俺だって、子供の言う

ことをいちいち信じる訳じゃない。でも、あんた

が必死に隠そうとしているのでわかったよ。能力

者はその子、一人だ」

相手のペースに乗ってしまっている。おそろく

こいつは場数を踏んで、人の心理を操るのが巧み

になってるんだらう。

「なあ、仲良くしようよ。俺、矢倉阿久羅あくらってい

うんだ。『ドグラ・マグラ』みたいでかっこいい
だろ？ ヒロ君は何て苗字みょうじだい？」

どうして、こいつは自分の名前を教えてください
んだ？ こっちの名前を知るためか？ でも、そ
れなら、本名でなくてもいいはずだ。偽名なの
か？ でも、もし本名だとしたら、それは何を意
味するんだ？

「ああ。偽名じゃないかと疑ってるんだね？ 無
理もないよ。疑うなら疑ってもいいさ。でも、も
し本名だとしたら、どうしてそんな大切なことを
教えたと思う？」

本当は悪いやつじゃないから。いや、違う。そ
んなはずはない。もしこっちの勝手な誤解だとし
たら、こんな人を不安にさせる現れ方はしないは
ずだ。

自分が困難な事態に陥っていることを加奈子に
知らせたいが、今、裕彦に伝言を頼むのはまずい。
あの矢倉とかいう男にさらに情報を与えてしまう
ことになる。

「はい、時間切れ」矢倉はぼんと手を打った。

を落とさずに突っ込んでくる。

しまった！ こっちが本命だったのか！

もはや逃げることもできず、良平は裕彦を自らの肉体で包むようにして守ろうとした。

強い衝撃を受けた直後、全身に鈍痛が走った。

息ができない。

傍に横たわる裕彦は動かない。

呼び掛けようとしたが、声が全く出ない。

裕彦の周囲に赤い液体が広がっていった。

良平の意識は急速に遠のいていった。

最後に矢倉の高笑いが聞こえたような気がした。